

井手訶六

いで・かろく

作家

経歴

生: 明治31年(1898年)6月20日、岡山県倉敷市玉島西浦生まれ

没: 昭和3年(1928年)3月29日午前1時、享年30歳、生家近くの井手家墓地に葬る

明治35年(1902年)11月	4歳	姉琴野死亡
明治35年(1902年)～ 明治36年(1903年)ごろ	4～ 5歳	父杏平、愛人をつれてウラジオストックに渡る この後10数年間満州、朝鮮を放浪
明治38年(1905年)4月	6歳	第六玉島尋常小学校へ入学
明治42年(1909年)3月	10歳	第六玉島尋常小学校卒業
明治42年(1909年)4月	10歳	この年より6年制となった八幡小学校に入学
—	—	生活が困窮のため叔父を頼って香川県三豊郡に移る
明治44年(1911年)	12歳	叔父が職を失い、母と叔父は備前田の口へ 訶六は遠縁に引取られ故郷に帰り高等小学校へ入学
明治45年(1912年)	14歳	小学校卒業後、福山市胡町の紙問屋・青景要七氏(市議)の養子となる
大正2年(1913年)4月	14歳	誠之館中学へ首席で入学する
大正2年(1913年)	15歳	クラス代表で弁論大会に出場
大正2年(1913年)	15歳	誠之会誌に『信用』を掲載
大正3年(1914年)	16歳	誠之会誌に『余が将来の希望』を掲載
大正5年(1916年)1月29日	17歳	父杏平、愛人のもとで病没
大正5年(1916年)2月	17歳	誠之会誌に『蘆田河畔に逍遥ひて』掲載
大正5年(1916年)7月	18歳	福山中学退学、玉島の母の元へ帰る
大正5年(1916年)9月14日	18歳	金光中学へ入学
大正6年(1916年)2月8日	18歳	結核発病
大正6年(1917年)5月18日～ 大正6年(1917年)12月2日	18～ 19歳	入院、この頃尼ヶ崎市金楽寺に住む
大正6年(1917年)9月13日	19歳	肺結核で金光中学を中退

大正7年(1918年)11月	20歳	兄正一死亡
大正7年(1918年)ごろ	20歳ごろ	玉島に帰り、宝亀山観音庵に住む
大正8年(1919年)12月23日	21歳	「落日讃」が朝日新聞懸賞小説で選外佳作となる この頃、生家の離れに帰り住む
大正10年(1921年)	23歳	山陽新報に翻訳小説掲載
大正10年(1921年)12月16日	23歳	「霹靂(へきれき)」が朝日新聞懸賞小説で一等入選となる
大正11年(1922年)1月1日～ 大正11年(1922年)6月30日	23～ 24歳	「霹靂」が「新しき生へ」に改題されて朝日新聞に連載
大正12年(1923年)7月1日	25歳	朝日新聞社より「新しき生へ」出版
大正12年(1923年)7月25日	25歳	盛文館より「新しき生へ」出版
大正12年(1923年)8月31日	25歳	「新しき生へ」、松竹で映画化(全6巻)、監督牛原虚彦
大正13年(1924年)6月17日～ 大正13年(1924年)12月21日	25～ 26歳	朝日新聞に『炬を翳す人々』連載
大正14年(1925年)10月5日	27歳	福永書店より『炬(ひ)を翳(かざ)す人々』出版
大正15年(1926年)1月1日～ 大正15年(1926年)12月	27～ 28歳	主婦の友へ『十字路の乙女』連載
昭和2年(1927年)	28歳	関西文芸へ短編小説『西瓜』発表
昭和2年(1927年)	28歳	乙女の園誌へ『富士ちゃんの記念』を発表
昭和2年(1927年)3月	28歳	文芸公論に『長篇と短篇』発表
昭和3年(1928年)1月1日	29歳	山陽新報へ『犠牲』発表
昭和3年(1928年)1月	29歳	文芸公論に『反普及的芸術の自滅』を発表
昭和3年(1928年)3月29日午前1時	29歳	流行性感冒のため急逝
昭和3年(1928年)10月	—	盛文館より『十字路の乙女』発刊
昭和12年(1937年)9月	—	「汎岡山」9号に『新しき生へ』紹介される
昭和18年(1943年)8月	—	「吉備歌壇史考」(湯本喜作著)に『炬を翳す人々』連載 中の訶六の消息が紹介される
昭和25年(1950年)12月1日	—	山陽新聞に永瀬清子氏が「回想の一節」として訶六を紹介
昭和26年(1951年)1月15日	—	玉島小学校 PTA 新聞に「玉島人物誌」として訶六の生涯 が紹介されている
昭和33年(1958年)1月29日	—	NHK 岡山にて郷土史を飾る人々のシリーズ中で「井手訶 六」が紹介される
昭和33年(1958年)	—	「高梁川」7号、8号に高梁川人物伝として、「井手訶六」 が取り上げられる

昭和35年(1960年)2月2日	—	山陽新聞文化サロン欄に、西尾政次氏の「井手訶六の追憶」掲載
昭和43年(1968年)9月	—	湯本喜作氏「留年の記」の中で訶六と『炬(ひ)を翳(かざ)す人々』を紹介

生い立ちと学業、業績

生い立ちと学業

岡山県浅口郡玉島(現倉敷市玉島)の生まれ。

号は蹄霜。

井手鐵處の弟である。

父は県会議員をつとめたり、地方銀行の頭取にもなった名士だったが、放埒な生活のすえ没落。

一家は離散し、父は再起をはかって朝鮮半島へ渡った。

訶六は福山市議員の某家へ養子となって、誠之館中学へ進み、各学年とも首席で通すほどの秀才ぶりであったが、のちには井手家へ戻り、金光中学へ転校する。

文章を書くのが好きで、誠之館4年生の時、数百ページの日本歴史を書いて教師をおどろかせたという。

大正6年(1917年)、肺結核で金光中学を中退。

業績

大正8年(1919年)には「落日讃」と題する作品を朝日新聞懸賞小説に応募して選外佳作まで行く。

翌々大正10年(1921年)、再び同懸賞に「霹靂(へきれき)」を送ってついに一等入選となった(新聞連載の時は「新しき生へ」と改題)。

おりからの大正デモクラシーの潮流にのって新しい社会をめざす青年像をえがいて好評、続いて「炬(ひ)を翳(かざ)す人々」「十字路の乙女」と長篇2本を発表したが、流行性感冒で病没。

長篇作家誕生を期待されたが、今やどんな文学事典にもその名を見出せないのは淋しい。

(出典1)

「信用」 一甲 井手訶六

人をして社会に生存する上に於て最も必要なるものの一は信用なり。

人にして約束を違へ虚言を吐き或は表裏の行をなすこと唯一度のみにてもあらんか社会より擯斥(ひんせき)せられ事業を経営するを得ずして終には産を破り住み馴れし祖先の地を後にし大海に漂ふ木葉の如く處定めず流浪せざるを得ざる悲運に陥り今更に事業を企図せんと欲して得ず困窮身に迫りて遂に身をおく所なきに至らん。

彼の犯罪人の如きも最初より悪人として生れたる非ずして多くは不信用に起因するもの多しとか聞くかかる肝要なる信用を己が身に得んとするには正直を守らざる可からず。殊は信用は商業社会に最も必要なるものにして実に生命ともいふべきものなり。一人之を守らざるものあらんか時間を浪費し手数を要し敏活なるべきも迂遠になり簡易なるべきも複雑となりてその迷惑云ふべからず。延いて国家の体面を汚し国運の隆盛を妨ぐるに至る慎まざるべけんや。 (出典2)

「余が将来の希望」 二甲 井手訶六

陣頭に立ちて三軍を指揮し、廟堂に入りて国政に参与す、日本男兒の本領たるに背かず。花鳥風月に嘯(うそぶ)き吟懐を遣る、亦風流才子の邪懐たるを失はず、然れども賦性各異る所あり、徒に虎を描かんとせば所謂猫に類するの嗤(わらい)を受けん、予や不才にして相將の任に値せず、粗野にして風流の味を解せず、相將の任風流の美は挙げて之を他の諸君に委し唯父祖伝来の業を継ぎ鋤犁(じょれい・じより、すきのこと)を執つて南畝に耕さんのみ。唯期せよ、他日一旦緩急あり、諸君の三軍を指揮し、国政に参与し、或は国風を謳歌するの際にあたり、西海の邊陲より起つて、其費を捧ぐる大地主の出づる事を。 (出典3)

「井手訶六文学碑」

情報提供：岡山県・長谷川たかゆき氏

井手家の菩提寺・円通寺近辺の円通寺公園に、井手訶六の文学碑があるという。碑には、以下のように書かれている。

「美も善も真も
その源をたずぬれば
同じく愛である
井手訶六
小説 新しき生へ より」

その案内板には以下の解説がある。

「井手訶六文学碑案内
 人類が根源的な愛によって統一される究極の理想を思いえがきつつ病苦と家庭的不幸のただ中から小説「新しき生へ」を創作
 天下に発表したのは井手訶六が二十四才大阪朝日新聞紙上であった。懸賞小説当選者としての彼の文名は言うに及ばず郷土水島灘の美しい風光があまねく知られることになったのである。苦闘は苦闘からのがれるためであり、今日の不合理に甘んじているのは、明日の真理へ達せんがための準備であるとした彼の作家精神は、その後発表した小説「炬を翳す人々」「十字路の乙女」にも貫かれている。彗星の如くその若く美しい光芒を放って消えた郷土作家井手訶六は永く私達の胸に記憶されることであろう。彼は明治三十一年に生れ昭和三年、玉島勇崎西浦の生家で、三十才の短い生涯を孤独のうちに病歿した。
 玉島文化協会」

主要作品

名 称	発 行 日	発 行 所	注 記
『落日讃』	大正8年(1919年)12月23日	—	朝日新聞懸賞小説で選外佳作
『新しき生へ』	大正12年(1923年)7月1日	朝日新聞社	—
『新しき生へ』	大正12年(1923年)7月25日	盛文館	—
『新しき生へ』	大正12年(1923年)8月31日	—	松竹で映画化(全6巻)、監督牛原虚彦
『炬を翳す人々』	大正14年(1925年)10月5日	福永書店	—
『十字路の乙女』	昭和3年(1928年)10月	盛文館	—

誠之館所蔵品

管理No.	氏 名	名 称	発 行	日 付
07171	玉島テレビ放送 制作	「たましま歴史百景 第53回 夭折の作家井手訶六 (玉島テレビ放送2015年1月放送)」	玉島テレビ放送	平成27年

出典1:『(福山誠之館高等学校図書館所蔵本)』、玉島文化協会刊、昭和51年11月10日

出典2:『誠之(第19号)』、44頁、「信用」、井手訶六、福山中学校校友会刊、大正3年3月

出典3:『誠之(第20号)』、12頁、「余が将来の希望」、福山中学校校友会刊、大正4年4月15日

関連情報1:『高梁川(#6)』、22頁、「作家井手訶六」、花田一重、昭和33年4月1日

関連情報2:『高梁川(#7)』、25頁、「作家井手訶六」、花田一重、昭和33年11月1日

2005年5月20日更新:本文・出典●2006年6月9日更新:タイトル●2008年1月9日更新:経歴・本文●2008年2月18日更新:本文●2012年3月8日更新:本文・出典・関連情報●2015年2月3日更新:経歴・本文・誠之館所蔵品●